

国語 第1学年 ひらがなをつかおう（1～2）

自分の学級に合わせて直すプロンプト

下の枠の文を全部そのままAI（ChatGPT・Claude・Gemini など）に貼り、質問に答えると、この単元の学習指導案が自分の学級に合わせて直ります。枠の後半には、直す対象の学習指導案が入っています。

あなたは小学校国語の授業づくりを手伝う役です。以下の指導案を私の学級に合わせて直してください。初めに、学級の人数と学習の組み方、関連する既習事項、読む・書く・話す際の困難や配慮、使える時間と本時の位置、ICTと紙の道具の条件を一項目ずつ質問し、答えを待ってから次の質問へ進んでください。条件がそろったら、促音・拗音・助詞などの表記の読み返しという目標を保ち、読み返しの印と書き直した生活文で学びを確認できるように全体を直してください。教科書の本文や台詞、挿絵、固有の問題は転載しないでください。配当時数は出典に従い、活動の配分を提案する場合は提案と明示してください。児童の姿を実測済みの事実として創作しないでください。三重の指導案の見出しの順と評価の三観点を保ち、内部IDなどを先生向けの文章へ出さないでください。変更箇所と根拠を示してください。直す対象の学習指導案は、この後に続けて書きます。

————ここから直す対象の学習指導案————

第1学年 国語科学習指導案

1 単元名 「ひらがなをつかおう（1～2）」

2 単元の目標

促音・拗音・助詞などの表記の読み返しを捉え、言葉を使う場面で役立てる。読み返しの印と書き直した生活文に自分の判断と理由を表す。友達の応答や自分の記録を基に、言葉の捉え方や表し方を見直そうとする。

3 単元の評価規準

〔知識・技能〕①促音・拗音・助詞などの表記の読み返しを理解し、学習で扱った語句や例を示して説明している。（〔知識及び技能〕(1)ウ）

〔思考・判断・表現〕①「書くこと」において、自分の生活文を声に出して読み、小さい文字や助詞を確かめて書き見直している。（B(1)エ）

〔主体的に学習に取り組む態度〕①見通しをもって言葉や表現を検討し、交流で気付いた点を基に、自分の読み方や表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

（1）単元について

この単元では、促音・拗音・助詞などの表記の読み返しを中心に学ぶ。自分の生活文を声に出して読み、小さい文字や助詞を確かめて書き直す活動を組むことで、言葉について知ることと、目的に合わせて使うことを結び付ける。指導要領の〔知識及び技能〕(1)ウとB(1)エに関係する学習である。成果は、作業が終わったかのほかに、読み返しの印と書き直した生活文にどんな判断の理由が残るかで捉える。

（2）児童について（学級の実態を書く）

（3）指導について

予想される難しさは、聞こえる音だけで助詞や小さい文字を書くことである。音を区切る手拍子と文の中での役割の確認を分け、助詞は文で読み比べる。初めの答えを消さずに残し、学習後に何を変えたか、なぜ残したかを比較できるようにする。児童の反応は予想で、実在の学級の姿を示すものではない。読む速さや記述量の差を、そのまま国語の力の差として扱わない。

5 指導と評価の計画（全2時間）

各回の学習 第1時（本時）：○その回に扱った表記を、学校で起きた出来事を書く文の中で使う。○口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますかを観点に、読み手が意味を取り違えないかを見直し、訂正した箇所を記録する。 評価：知①（表記と語の意味）・思①（文章の見直し）

各回の学習 第2時：○その回に扱った表記を、学習で観察した物を書く文の中で使う。○口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますかを観点に、読み手が意味を取り違えないかを見直し、訂正した箇所を記録する。 評価：知①（表記と語の意味）・思①（文章の見直し）

6 本時の指導（1／2）

（1）本時の目標

促音・拗音・助詞などの表記の読み返しについて、例や資料を根拠にした自分の考えを読み返しの印と書き直した生活文へ表すことができる。

(2) 学習過程

【導入】

学習活動：1 身近な経験と既習の言葉を確認、今日使う教材や資料を準備する。

○「口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますか」

【めあて】促音・拗音・助詞などの表記の読み返しについて、自分の考えと理由を表そう。

予想される児童の反応：・「へ」は行く先を表しているので、音だけで字を決めない。

・初めの見方では決められない箇所もあり、例を比べてみたい。

指導上の留意点：本時に使う具体例が見える所へ置く。聞こえる音だけで助詞や小さい文字を書く姿が見られても、すぐに訂正せず、どの言葉や経験からそう判断したかを聞き取る。

【展開】

学習活動：2 自分の生活文を声に出して読み、小さい文字や助詞を確認して書き直す。

3 読み返しの印と書き直した生活文の下書きや途中の記録を示し、考えた理由を説明する。

○「口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますか」

4 聞き手は、説明に使われた語句や資料を示して質問する。答えが異なる所は、意味や条件を調べてもう一度表す。

予想される児童の反応：・「へ」は行く先を表しているので、音だけで字を決めない。

・最初はそう考えたが、別の例と比べると直したいところが見つかった。

指導上の留意点：音を区切る手拍子と文の中での役割の確認を分け、助詞は文で読み比べる。説明が難しい児童には、対象の語句を選ぶ、線や矢印で関係を示す、口で説明するという方法も用意する。書く量を減らす場合も、本時に考える言葉の関係は残す。早くできた児童には、同じ説明が通らない場合や、他の言い方の可能性を考えさせる。

評価：思① 自分の生活文を声に出して読み、小さい文字や助詞を確認して書き見直している。(途中の記録・説明)

【まとめ】

学習活動：5 読み返しの印と書き直した生活文へ、本時の判断と理由、見直した箇所を記す。

【まとめ】「へ」は行く先を表しているので、音だけで字を決めない。

6 初めの答えとの違い、または理由を確認して残した点を振り返る。

予想される児童の反応：・促音・拗音・助詞などの表記の読み返しを、別の場面でも意識して使いたい。

指導上の留意点：結論が教師の例と同じかだけで判定しない。口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますかへの答えに、語句や事実を示した説明があるかを見る。課題が残る場合は、次の関連学習でも同じ観点で記録を集める。

評価：知① (語句や関係の説明)・態① (見直しの理由。単元を通した記録と合わせる)

(3) 本時の評価

おおむね満足できる状況は、読み返しの印と書き直した生活文で、本時に選んだ語句や説明の理由を表している姿とする。聞こえる音だけで助詞や小さい文字を書く場合は、音を区切る手拍子と文の中での役割の確認を分け、助詞は文で読み比べる。発表の回数や作品の飾り方は評価の根拠にしない。

(4) 板書計画 (縦書き・右から左へ)

縦書きで右から左へ構成する。右端に単元名と本時の問い。その左に、児童が最初に出した考えと比較する例を置く。中央には促音・拗音・助詞などの表記の読み返しを確認する語句や関係を並べ、線や矢印で根拠と判断を結ぶ。左側に読み返しの印と書き直した生活文で残す項目と見直しの理由を置く。左端は本時に確かめたこととその後を使う場面の記録にする。教科書の台詞や文章はこの配布物へ複製しない。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

